
日向のひまわり

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日向のひまわり

【ZPDF】

N6403X

【作者名】

暁

【あらすじ】

いつもホストに間違われる弁護士。彼を取り巻く女性たちに翻弄されつつ、彼は心から愛せる女性に出会えるのか。

そのへゝ『タクシードライバー』（前書き）

ベテランのタクシードライバーが乗せたのは・・・

その1> 『タクシードライバー』

忙しなく行き交う人の間を縫うように、黒いロングコートを着た長身の男が足早に大通りに向かつていた。

午後ということもあり、仕事を終えて家路を急ぐもの、ブティックのロゴが入ったバッグをいくつも持つた女性、その間を得意げにすり抜ける自転車。色付き始めた街路樹の下は、昼間よりも賑わっている。

スタイルシックな黒い鞄を片手に、高級腕時計を嵌めた左手を挙げ、タクシーを止めた。

違法駐車された車の間に、見事なテクニックでタクシーが滑り込む。ドアが開くと、男は長身を屈めて素早く乗り込むと、整った指先でデザイナーズブランドの眼鏡を押し上げる。

「 区 町三丁目の滝沢法律事務所まで」

「はい、了解しました。」

運転手が業務的な返事を返すと、シート横のレバーを引いてドアを閉めた。

表示を【乗車】に切り替え、右にウインカーを出し、後方を確認しながら車がゆっくりと動き始めた。

「ちよっちよっちよっ」と一待つて！私も乗りますーーー！」

髪を乱し、息咳ききつた若い女性が、動き始めたタクシーの窓を激しく叩いた。

驚いた運転手は「うわわー」と声を上げて車道に半分乗り入れたところで急停車すると、辺りから激しいクラクションが鳴り響いた。

「困惑の運転手を他所に、その女性は勝手にドアを開けて乗り込んできた。

「あ、危ないですよーお密やんー！」

夕方で交通量が増えた路上で、いきなりの急停車で衝突されかねない。冷や汗を浮かべた運転手は、いきなり乗り込んできた女にさすがに注意した。

髪をボサボサにさせた女性は「すみません」軽く会釈をし、男の隣に落ち着いた。

「先生のせいで怒られたじゃないですかー！」

女性はシートベルトをしながら小声で文句を言つた。

「無理に乗車してたのは君ですよ。」

「そーですけども……」

停車したまま運転手が戸惑つていると、再びクラクションを鳴らされた。

「あのー」「あ、すみません、出してください」「……はい」

運転手は、睨んでくる後方の車に頭を下げながら、どうにか車の流れに乗つた。

夕方とはいえ、まだ帰宅ラッシュとは行かないようで、タクシーは意外なほどスムーズに走つた。

「…市来さん、何してたの？」

車が走り出してまもなく、眼鏡をかけた男が隣の女性に話しかけた。運転手は自然と耳をすませる。

「事務の人呼び止められたんですね。」

「また面接の日程表渡されたの？」

「……」

男は「図星か。」と一言つぶやき、眼鏡を押し上げた。

運転手は、チラツとミラーに視線を走らせる。

勤続十数年のベテラン運転手は、日々たくさんのお客を乗せている。

中には明らかに援助交際と思われるカップルをホテルに運んだり、車の中で別れ話を始めたあげく取つ組み合いの喧嘩をされたり、無賃乗車され、その度に上司に絞られる。

なんだ仕事を辞めようと思つたことか。

そうかと思えば、怖そうな男性客に運転を褒められたり、無事故無違反で会社から表彰されたり……悪い事ばかりでもないと思い直す。

・・・人生とは悲喜一色でもある。

(さて、今日のお客はどういう組み合わせだ?)

運転手はチラリとルームミラーに視線を向けると、こつそり観察を始めた。

先に乗り込んだ男は、スーツもコートも、よくわからないが高級そうだ。かけている眼鏡も、安物ではないだろう。

ダークブラウンの髪は長めで、一見するとカタギのサラリーマンには見えない。

（うん、ホストだな）

運転手はそう結論を下した。

車は交差点を左に曲がった。

十一月に入り、色づいた街路樹が少しづつ葉を脱ぎ捨て始め、冬の到来に備えている。

右折したところで、タクシーは赤信号で停車した。

運転手の観察はもう一人の女性へと移る。

隣に座る男とはとても不釣り合いで、髪型もメイクも無理がある。どうみても学生だ。

（そう言えば、さつき【先生】って言つてたな。この男はどうみても学校の先生つて感じじゃないよな…）運転手は密かに首をひねる。

信号が青に変わり、静かに走り出す。

男の職業をホストだと決めつけている運転手は、リクルートスーツを着た女性にそう言わせているのだと思つた。

（まったく、若いのにこんなホストに入れあげて・・・）

自らもいい年の娘がいる運転手は、コンパクトで髪を直す女性に、父親の心境で説教をしたい気分になつた。

「…市来さんわあ、そろそろソレやめたひへ。」

高級スースの男が女性に話しかけていた。
運転手は耳をそばだてる。

「なにがですか？」

市来と呼ばれた女性は、とぼけたように、コンパクトを覗いて髪を直している。

「…そのリクルートスース。いい加減やめたらっ。」

「別に不自由していませんから。」

市来は少々ムッとしたように男を睨むと、パクンと乱暴にコンパクトを閉じ、バッグにしまった。

「今日も就活と間違われて、日程表渡されたんでしょう？」

（日程表？）運転手の耳はこよこよ研ぎあわされて行く。

「やうなんですかじ、なんかコレいつこいつのが見つからないっていうか…」

「あ～やうこえは、この前着てきたのは、七五三みたいだったよね

男は、額にかかる前髪を指先で後ろに流し、懶らじい溜め息をついた。市来はむうつと唇を尖らせると、隣りの男を涙田で睨んだ。

（この人にだけは言われたくない。）市来は内心毒づいたが、賢明にも口には出さなかつた。

「…君さ、自分が童顔だつて自覚ないの？」

「あ、ありますよ…だからメイクとか髪型とかで努力してるじゃないですか！？」

「……努力？」

口を尖らせ、恨めしそうに睨む市来に、男は眼鏡のフレームを懶とらしく摘み、ジロジロと観察する。

無駄に整つた顔が近付き、市来の顔が急激に熱を帯び、心臓が口から飛び出しそうになった。

（き、今日は髪型もメイクも完璧だもん！）市来は恥ずかしいのを堪えて睨み返した。

「…」の髪は自分で？

「み、南青山の美容院でやつてもらいました…」

「……美容師さん、自信なくしただろ？ね…」

「――ひどつ――カラーも含めて一萬五千円もかかったのに…」

「一萬――無駄遣い…」

「――ひどい…」

べそをかいたように顔をくしゃくしゃにする市来の鼻を、男がわざと摘んだ。

「あにふるんでふか！（何するんですか！）」

「市来さんさ、自分らしさってのを大事にしたらう？」

「……？」

摘まれた鼻を押さえ、キヨトンとする。その顔がおかしかったのか、

男はクスッと笑った。

「童顔を無理に隠そうとするから、余計に違和感が出るんだよ。メイクもスーツもヘアスタイルも、君にあつたものがあると思うよ？ 美容院で言われなかつた？」

背が低い上に童顔で、高校生にしかみえない彼女が、ハイウッド女優の奇抜なメイクや髪型が似合つはずもない。いつそ日本のモデルを参考にすればいいものを、選りに選つてチョイスがハイウッド。市来のセンスが伺える。

「俺がスーツを選んであげようか？」
「え！ 買つてくれるんですか？」
「……選んであげようか？ って聞いたんだけど？」
「えへ！ 買つてくれないんですか？」
「なんで君に買つてあげなくちゃいけないの？ 自分で買いなよ。」「~~~~けち。」

背後のやつとりに、運転手はいよいよ混乱して來た。

（ホストと密じやないのか？ この男、いつたい何者だ？）

運転手は、脳内が混乱しながらも、見事なドライビングテクニックで安全に右折する。

その後、二人は黙り込んでしまつた。

再び赤信号で停車すると、停留所に止まつたバスから人が降りているのがみえた。

何気にその光景をみていた男が、いきなり身を乗り出した。信号が青に変わり、タクシーが動き始めると、男は焦つたように運転席のシートを叩いた。

「すみません降りますー止めて下わいー」

「え？ は、はい。」

「先生？」

突然の事に、運転手も市来も驚いていたが、タクシーは左に寄つて停車した。

「市来さん、先に戻つてー！」

「え、ちょっと、先生？ どうしたんですか？」

「運転手さん、彼女を目的地に送つて下わい」

そういひと、男はタクシーチケットを市来に握らせ車を降りて行つた。

「も～～！ 勝手なんだからあーーー！」

市来は、走り去る男の後ろ姿に文句を言つた。

「……あの人は何者なんですか？」

「え？」

ついに堪えきれずに運転手が尋ねた。

その顔に、市来は運転手が彼をどう見ていたのか悟つた。

「あの人は弁護士ですよ」

「ええ！ ！」

「いつもホストに間違われるんですね」

「…………はあ」

さすがに自分もそうでしたとは言えなかつた運転手だが、その顔が

全てを物語ついていた。

「彼は、本橋啓哉。^{もとはし ひろや}間違いなく、滝沢法律事務所の弁護士です。」

「へえ……そう……なんですか……」

運転手は、顔を真っ青になりながら、車を発進させた。

「自分を棚に上げて、私の事をよくいいますよね～？」

「……それで、あなたは？」

「弁護士秘書です（自称）」

「ええ！！社会人だつたんですか？！」

「…………失敬な。」

本橋の職業を聞いたときよりも大きな反応に、市来は人の事は言えなかつたと反省した。

その1> 『タクシードライバー』（後書き）

彼を覚えている方、いたらしいな～♪
分からぬ方は、【嫁ですがなにか？】 参照（笑）
ちょっと直しました。

その2へ 『ねぐもじつの記憶』

右側のドアを開けタクシーを飛び降りると、本橋は一時散いちやくさんに停留所に向かつた。

自分の見間違い出なれば、バスを降りて派手に転んだ女性は彼女だ。

昔からそそっかしく、何もないところによく躊躇っていたのが思い出された。

ガードレール代わりのツツジの間をすり抜けると、彼女は地面に散乱したバッグの中身を集めているところだった。

「梢こずえ！ 大丈夫か？！」

「え？」

少し癖のある髪を顔の横で結び、生成りのポートの下には、ゆつたりしたニットのチュニックを着ている。

急に声をかけられ、地面に座り込んだままの彼女は、本橋を見てぽかんとしていた。

「……ひる… や？」

「何ほんやりしてんだよ！ 大丈夫か？ 怪我は？」

「久しぶりね！ 元気だつた？」

立たせようと手を差し出した本橋に、梢は嬉しそうに笑みを浮かべた。

その変わらない笑顔に、男の心臓がドクンと跳ねる。

彼女の名は、深山 梢。本橋の大学時代の恋人だ。

ひょんな事から彼女と再会したのは、いまから三年程前の札幌。

その当時、札幌の法律事務所に勤めていた本橋は、おおて大手企業の顧問弁護士も勤めていた。

だが、その会社の常務が癖くせのある人物だった。

己の私服を肥やすために、あらゆる手を使う男。

そして、その娘もまた、とんでもないわがまま娘で、自分の思い通りにいかないと、あらゆる手を使って報復した。

そんなバカ親子に目を付けられたのが、柿崎かきざき 裕一郎ゆういちろうだった。

彼の有能ぶりに目をつけ、娘婿むすめむじとして取り込み、裏の仕事の片棒を担がせようと企んだ。

だが、彼には恋人がいて、すぐには引っ張り込めそうもなかつた。

常務とその娘は、二人を別れさせる事を計画した。

題して【好きな人ができました】作戦。

この程度の思考回路でよく大学受かったな。と、本橋は本氣で呆れたが、その誑かされる気の毒な女性が、梢だった。

おバカなクライアントのおバカな計画に関わりたくない。

傍観を決めていた本橋だが、常務の娘の冴子が、梢を襲わせる作戦を練つていた事を知つた。

×××まで決めていた冴子に、自分が唆すからと、強引に計画を変更させた。

しかし、自分が行動を起こす前に、わがままを爆発させた冴子が、梢に怪我を追わせてしまった。

その結果、病室での妙な再会となつた。

おまけに、一人の仲睦まじさまで見せつけられ、もう自分の付け入る隙などないと、思い知らされた。

それから数ヶ月後、札幌の事務所を辞め、嘗て世話になつた姉弁に誘われて、東京にやつて來た。

挨拶代わりに梢に会いに行つたが、梢は思わず火災に巻き込まれ、意識不明という辛い再会となつた。

梢の恋人である柿崎の家に居候し、時間の許す限り彼女に付き添つた。

そんなことで、彼女を捨てた過去が消える訳ではない……わかつても、何かしたかった。

やがて、彼女が目を覚まし、無事に退院したその日、本橋も静かに姿を消した。

梢の幸せだけを祈つて……

その翌年、二人は結婚し、梢は【柿崎】と性を改めた。

「こんなところで会うなんて、ビックリ！」

最後に会った一年前よりも、ふんわりと暖かい雰囲気を纏つ梢に、本橋の動悸はより早くなる。

「……なつ、なに暢氣^{のんき}に笑つてんだよー」とかく立つて、ほらー。

怪我は?

「あ、うん。えっと……ちょっと擦りむいたみたい」

両の掌を差し出すと、痛々しい擦り傷に血が滲んでいた。

「まつたぐ、このおつちょいちよこめつーどー見て歩いてるんだよー！」

「やだ…もしかして、見てたの？」

「うん、しつかりとね。ーー…たぐ。相変わらずだな。お前は。」

呆れた振りをして、彼女の小さな手をそつと握る。彼女の手は、相変わらず冷たかった。

冷え性な梢の指先を、昔はよく、自分の体温で温めてやっていた。

本橋はその手を離し、変わりに地面に散らばった荷物を搔き集めた。

「ちゃんと全部ある?」

バッグを梢に渡し、中身を確認させる。

「えーっと…携帯、お財布…あ、大変。手帳がない…」

「え? 手帳? どんなの?」

「えーっと、ちよつと黄色っぽくて…」

本橋は周囲を見回した。すると、ツジジの根元にそれらしい物を見付けた。

「あつ、これかな？――――！」

拾い上げた手帳に、本橋は凍り付いた。
梢が落とした手帳……

それは、母子手帳だった。

母親の欄には【柿崎 梢】と、見覚えのある几帳面な文字が。
そして、その下の父親の欄には【柿崎 裕一郎】と、彼女の夫の名
が力強く記されていた。

二人が結婚して、もうすぐ一年になる。子供ができていても、何の
不思議もない。

それなのに、二人の名が記された母子手帳を見た瞬間、頭の奥の方
がじんじんと痺れ、喉が締め付けらるよつに苦しく息もできない：
…やつとの思いで唾を飲み込んだ。

それでも、うまく考えがまとまらない。

いま、自分が立っているのか、座っているのか、それすらもよくわ
からない。

そして、拾い上げた手帳がなんであるか、分かつてはいるはずなのに、
理解できない……。

『……妊娠？…………梢が…………妊娠…………？』 同じ言葉が繰り返し脳内

を巡る。

「啓哉？どうかした？」

立ち尽くす本橋を不思議に思つたのか、梢が顔を覗き込んで來た。

のふのふと視線を向けると、記憶がフラッシュバックする。

喧嘩をした時、怒つて背を向ける自分に、梢はよく、いつも顔を覗き込んできた。

大きな目で『まだ、怒つてる？』と、聞いて来る彼女を抱き締めて、いつも仲直りしていた。

もひ、後戻りなどできない、遠い過去だ。

あの時、あんな喧嘩さえしなければ…

あの時、彼女の事を信じてさえいれば…

本橋は、どうにもならない後悔に、きつく唇を噛んで、瞼を閉じた。

「……どうしたの？大丈夫？」

梢の声に、大きく息を吐くと、手帳を彼女に渡した。

「……赤ちゃん……できたんだね。おめでとう」
「ありがとう」

幸せそうに笑む彼女が眩しくて、眼鏡の奥で僅かに目を眇めた。梢の纏う雰囲気が柔らかくなつたのは、氣のせいではなかつた……。

「……いま、何ヶ月？」
「えつと、四ヶ月に入ったところ、かな？」
「へえ、四ヶ月か……よんか、げつ？……つて、おいつ！」

個人差はあるだらうが、四ヶ月と言えばまだ定期とは言えない。外出はいいとしても、転ぶなどもつてのほかだらうー？本橋は、自分の顔から血の氣が引いて行くのがわかつた。

「お、おまつ！何やつてんだよ！なに転んでんだよ？！」
「え？あの……大丈夫よ、受け身取つたし！」

にっこりと笑みを浮かべ、尚かつサインを出した梢に、なんだか無性に腹が立つて來た。

「……受け身ねえ……おまえがマトモにシャトルを打ち返したの、見た事ないぞ？」
「ひどーーー！一緒に試合にも出たじゃなーいー！」

二人は共に大学でバドミントンサークルに所属していたが、梢はサークルで評判の【運動音痴】だった。

当然、試合にも出た事がない。彼女のポジションは常にベンチだ。

「……ベンチは、試合に出たつて言わないから……」

本橋はとりあえず、彼女の全身をぞつと検分した。よく見れば、黒いパンツの両膝が汚れていた。

受け身つてコレか？本橋は、この能天氣で無謀な妊婦を、叱り飛ばしたい衝動に駆られた。

が、そこはあえてぐつと堪えた。何しろ相手は妊婦なのだ。

「……それで？…今日は、何をしに出て来たんだ？その様子じや、会社休んだんだろ？」

「うん、この先のデパートに用があつたの」

デパートという割りに、荷物は彼女のバッグだけだ。

「買い物じゃないの？」

「裕一郎さんのいとこが、そのデパートのお店を任せられたんだって
∨ それで、挨拶をしに行って来たの」

両手に擦過傷さつがしあうをこなえて、暢氣のんきに笑う梢。

再会したころは、酷くよそよそしく頑だつた。

その原因が、少なからず自分にあると知っている本橋は、学生時代に戻ったように、穏やかに話す彼女が、夫にどれほど大事に慈しまれているのか、嫌でも理解できた。

もう、頑に我が身を鎧う必要がなくなつたのだろう。嬉しいような、切ないような……本橋の心中は複雑に揺れた。

「……それはいいとして、柿崎サンは、外出のこと知ってるの？」

「……え……つと……」

結婚前から梢にべた惚れの夫が、妊娠初期の妻を独りで外出されるとは思えなかつた。

案の定、彼女の挙動が怪しくなる。

「……正直に言え。」

「……し……らない……かな～？」

昼に『今夜、遊びに行くからねー』と電話をもらい、嬉しくなつて外出し……今に至る。

「は～～～～～～～」

やつぱり。と、本橋は肩を落とし、頭を抱えた。

やおら携帯を取り出すと、ピピッと操作し、耳にあてた。

「……どーにかけてるの？」

嫌な予感を覚えつつ尋ねると、本橋はすぼめた唇に指を立て、しー。と片目を眇めた。

「あ、もしもし？柿崎サン？俺。久しぶり！」

予想があたり、梢は青くなつた。

『おう、久しぶりだな。どうした？』

「あのさ、梢が・・・」

「ひひひ啓哉！大丈夫だから！ホントに大丈夫だから！」

梢は必死に電話を奪おうと手を伸ばすが、あっさり交わされた。

『お前、うちに来てるのか?』

「いや、俺は仕事帰り。つまり、外。』

定時に仕事を終えようとしていた柿崎は、ハンズフリー端末を耳に着け、会話をしながらパソコンのキーを叩いていた。その手がとまる。

『……外?』

「あのせ、たまたま通りかかつたら、梢が派手に転んでたのに出くわしてや』

『——なつ——！転んだ！？』

電話の向こうで大きな物音がした。

『そ、それで、梢に怪我は？いや、梢に変わってくれ！』

「はい、梢。』

「……啓哉のばかあ』

半べそ状態の梢は携帯を受け取ると、恐る恐る耳に当てた。

「……ゆ、裕一郎さん？」

耳に当てた途端、肩をすくめた。びりやりりりれていく。じりじり。

「え？あの、本当に大丈夫だから……え、はい……啓哉に代わ
れって」

しょんぼつした梢から携帯を受け取る。

「柿崎サン、あんまり叱つたら、胎教によくな」よ?」

『分かつてゐよ! それより、あと四十分、いや、三十分で迎えに行くから、それまで梢を頼めるか?』

「ああ、俺は構わないよ。じゃあ、場所はね?」

一人の会話を聞きながら、梢はまだしょんぼつとしている。わざわざまでの暢気な空氣は、どこかへ飛んでしまったようだ。

「いの先のカフフで待つてゐてね。」

「……」

可哀想なぼくしょんぼつしてしまった梢に、本橋はすこし罪悪感を覚えた。

「……そんなにし�ょげるなよ。柿崎サンだつて、梢の体を心配して……」

「……違つて……なにが?」

俯いた梢が、涙声で呟いた。

俯いたまま立ち戻る梢は、コートの袖で涙を拭っていた。夫に叱られたのがそんなにショックだったのか? 本橋は自分が泣かせてしまったのかと、オロオロした。

「……裕一郎さん、いま大きなプロジェクトのリーダーを任されていの。ホントなら、残業しないと追いつかないくらいなのに、私の

為に定時で帰つてく来てくれるの……」

「…………つと。」

梢は、夫の仕事の邪魔をしてしまつたと、肩を震わせ、声を殺して泣いていた。昔から責任感が強かつたつて、本橋は、片腕で梢を胸に抱き寄せた。

「…………今だつて…………あつと忙しい筈なのに、私のせいで……」

梢は、夫の仕事の邪魔をしてしまつたと、肩を震わせ、声を殺して泣いていた。昔から責任感が強かつたつて、本橋は、片腕で梢を胸に抱き寄せた。妻を持つて、心配は耐えないだろうけど」

「…………ヒドイ」「…………ホントは、梢が一番わかつてゐるんだろ?だから、迷惑を掛けてしまつたと泣いてるんだ……」

「――ト越しに感じるのは、体温が、懐かしかつた。

梢は、よくいつもやつて抱き締めてもらつたことを思い出していた。嬉しいときも、悲しいときも、喧嘩した後も、必ずいつも抱き締めてくれていた。

だが、その腕の温もりは、懐かしくはあつても、もはや愛しい存在ではない……自分には、夫の腕の中が、一番安心できて、愛おしいものだつたかひり……。

「………… もう、大丈夫。」

軽く押し返して来る感触に、本橋は強く抱き締めたい衝動に狩られた。

きつく抱き締めて、自分の腕の中に閉じ込めておきたい……そん

な衝動を、奥歯を噛んで堪えると、そつと腕を放した。

「……啓哉にも、迷惑かけて……」「めんね？」

目尻に涙を溜めたまま、恥ずかしそうに微笑む梢の頭を、大きな手

でくしゃっと撫でた。

「……バカだな、おまえ。」

「え？」

「心配はしても、迷惑だとは思つてないよ。わあ、早く店に入ろう。

風邪ひくよ。」

「………… ありがと」

本橋の笑みが寂し気に見えたが、梢はあえて気付かない振りをして

笑みを返した。

説明すべからずなつてしまつた……あとで修正せねば。

その③へ 『ほんとうの自分…』

柿崎が指定したカフェは、十七時以降はバーになるらしく、他のカフェと違つて落ち着いた大人の雰囲気があつた。店内にはジャズが静かに流れ、テーブルや椅子の他、細かな装飾に至までアンティーク調でまとめられている。

昼間は開け放たれている大きなガラス戸は、今は閉じられ、洒落たショーウィンドウへと姿を変えていた。

柿崎は車で来るとのことだつたので、路上パークィングが見渡せる席を選んで座つた。

背の高いウェイターがメニューと一緒にプランケットを持ってやって来た。

膝を暖かなプランケットに包み、一人でメニューを選ぶ。

梢はカフェには珍しいレモネードを見付け、それをホットで注文し、本橋はカプチーノを注文した。

ウェイターが立ち去ると、梢は冷えた両手に息を吐きかけながら、店内をぐるつと見回した。

「…素敵なお店ね…緊張しちゃう」

「俺も初めてに入るよ。」

丸い木のテーブルを挟み、向かい合う男女は、クスッと笑いあつた。

「梢、傷をみせて。」

「え、ああ…ホントに大したことないのよ?」

「いいから。」

梢が両手を広げると、本橋は袋に入つたおしごりを取り出して、傷の周りの泥を丁寧に拭う。ほんの小さな擦り傷に、ホッとした。ついでに指先まで丁寧に拭いた。

「ね？全然平気でしょ？」

「よかつた。」

「心配しますが、」

くすくす笑う彼女に、本橋も目を細める。この時間が永遠に続いたらいいのに…

— π π π π π —

激しく窓が叩かれ、店内の客もろとも視線がそちらへ集中する。窓にへばりつく女性をみた本橋は、小さく「げつ！」と呟くと顔を背けた。

何かのコスプレか？と思うほど、どうせりフリルがついたコートを着た女が、ガラス窓を叩いて必死にアピールしている。

『咲くやんや』

窓ガラスにキスする勢いで迫る女性に、店内の客はどん引きである。

「…………啓哉の知り合い？」

いや、知らない!

『ひ～る～や～くう～ん！～』

窓の向こうでは、大きく両手を振つて猛烈なアピール。

「……名前、呼んでるけど……？」

「知らない知らない……（つてか、なんでいるんだよお……）」

梢は、窓の外でぴょんぴょん跳ねながら、必死に自己アピールをしている女性を、畳然としながら眺めていた。

斎藤ちえは、一年程前に借金の返済について相談にきた女性だった。借金の理由は、連日のホストクラブ通い。NO-1を指名したいが為に、消費者金融に手を出し、のつぴきならない状況で駆け込んで来たのだ。

結局、街金の違法金利が判明し、返済額を減らす事ができた。

しかし、本橋を一目見て気に入った彼女は、ホストみたいなのに弁護士なんてステキ！と、事務所で大はしゃぎした掛け句、本橋を【運命の王子様】だと言つて、暇さえあれば事務所に押し掛けていた。

「あ～～もう～～！勘弁してよ……」

本橋は、頭を抱えた。

斎藤ちえは、まるで宝塚の主役のよう、胸元で指を組みクルつと回ると店に飛び込んで来た。

頭にはレースのでかいリボンを着け、レースとフリルのピンクのコートをひらひらさせている。

当然、中のワンピースも同様だ。驚いた事に、靴にまでフリルがついている。

自分なりにカスタマイズしたのだろう。左右のフリルがチグハグだ。

そんな彼女は、九月で四十歳になつたそつだ。

常にこいつた格好なので、本橋の事務所では【フリル女】と密かに呼ばれていた。

「あ～～～入つて來たよ…」

縦ロールの髪を弾ませて、近付いて来る……

本橋は、面倒臭そうに頭を搔いた。梢は突然の出来事に、なになんだか分からず、ぽかんとしている。

フリル女は厚かましくも、一人が座るテーブルに別の席から椅子を持つて来て座つた。

「こんばんは、啓哉くん！こんなところで会えるなんて、私たちつてやっぱり出会いの運命なんですよ！」

「…………それ、勘違いだから」

柿崎が彼女を迎えて来る、その僅かな時間を穏やかに過ごしたかった本橋だが、彼の思惑は儘く砕け散つた。

「……啓哉、こちらは？」

梢は目をパチクリさせ、頭の先から爪先までフリルで飾られた謎の女性について尋ねた。

「……説明たくない。つとは、本人を前にさすがに言えず、もう一度大きく溜め息をついた。

「……彼女は……」

「つていうか、アンタ誰よ。私の啓哉くんに馴れ馴れしいつ！」

「……え…」

急に態度を豹変させ、フリル女は梢を睨みつける。

「前にもこんな事があつたような…。梢は、急いで足を彼女から遠ざけた。また踏まれでもしたら大変だ。

「おい…梢は関係ないだろう。絡まないでくれ…」

本橋がうんざりと言つと、フリル女はショックを受けたように大きな声を上げた。

「まあ！“梢”ですつて？アンタ！一体、彼どどじうこう関係なのよつ！！」

「…え…あの…私は…」

「ひどいわ〜〜！私の事は未だに“斎藤さん”なのに！…なんでアンタだけ特別なのよー！」

囁み付かんばかりの勢いで突っかかってくるフリル女に、梢はどうしていいのか分からず、ただオロオロした。そこへ、まだ若いのに、やけに熟れた様子のウェイターが、飲み物を運んで来た。

「お待たせ致しました。」

この状況にもまったく動じる様子もなく、また詮索がましい視線を向けるでもなく、梢と本橋の前に、それぞれ飲み物を置くと、店内の空気を一変させたフリル女にもメニュー表を渡した。

「あ、ココアをお願いします」と、さも当前のように注文したフリル女に、本橋は僅かに眉を顰めた。

『……居座る気かよ…』苛立ちに、思わず煙草を取り出すが、梢が妊娠している事を思い出し、黒いパッケージを上着のポケットにしました。

どのみち、店内は禁煙なので吸えないのだが。

洒落たカフエで、ほんのひと時の甘い夢を見ていたのに、突然現れたフリル女のお陰で、まるで修羅場のようだ。

——浮気相手の登場かしら？

——いや、ホストの取り合いじゃね？

——あの人、どこのお店の人かしら？ステキね…

店内の客がひそひそと話しているのが、店内が静かなせいと、それがいやに大きく聞こえた。

『つたく、人の外見で勝手な妄想しやがつて…』本橋は小さく舌打ちした。

間もなくココアがテーブルに追加されると、フリル女はテーブルに置かれているザラメをココアに一匙足した。

「……それで？斎藤さんは、なんでここにいるの？」

少々棘のある台詞で尋ねる。彼女は、熱いココアを一口啜ると、思い出したように顔を輝かせた。

「そうそうーーそうなのーーショッピングの帰りに通りかかったら、啓哉くんが見えてねーここで会えるなんて思つてもいなかつたから、私もーー嬉しくてーー」

甲高い声で興奮氣味に喋り始めた。

「だつて考えてみて?こんな大都会で、こんな偶然つてそろはないと思いません?ーーこれはもう、運命としか言ひようがないと思うんです!」

「……ただの、偶然だろ?」

苛立たし気に言い捨てるが、フリル女はまったく聞いていない。それどころか、運命の巡り合わせだ、結ばれる運命だとか、独りで興奮している。実におめでたい思考回路である。

温かいレモネードのグラスを両手で持ち、息を吹きかけながら、梢はこの状況が酷く懐かしく感じていた。

大学時代、本橋とデートをしていると、必ず彼の追っかけが一人の間に割り込んで来たものだつた。

デートの邪魔をされて面白くなかったが、梢は振り回される本橋が心配だつた。

小さなテーブルを挟んで座る本橋は、自分に向けていた笑顔を消し、面倒そうに応対している。

その顔も、昔のままだ。

『…啓哉は、優しい人だから、どんな人も放つておけないのね…』
梢はしみじみ目の前の一人を見て、レモネードを啜った。

実際には、放つておけないのではなく、向こうから絡んでくるのだが。

本橋は、この田立つ外見のせいで、学生時代から勝手にプレイボイにされていた。身に覚えのない女性遍歴が自分の知らないところで勝手に伝説化されていた。

時には、まったく知らない女子から『アナタの子を妊娠したの！ 責任を取つて！』と詰め寄られた事もあった。もちろん事実無根だ。
なるべく女とは関わらないように過ごしていた。

梢がサークルに入った時、どんくさい女だと特に気にもしなかった。女は面倒臭いだけだし、関わりたくないとも思つていた。

どんくさい彼女は、いつでも一生懸命だった。

そんな彼女を、いつの間にか目で追つている自分に気付いた。

それが、いつの間にか特別な存在に変わった。

その梢に告白された時、自分でも不思議なくらい素直に嬉しかった。彼女は自分をありのままに受け入れてくれ、悪意のある嫌がらせをされても、自分のことを信じ続けてくれた。

彼が弁護士を目指したのは、そういうた身に覚えのないトラブルの多さからだつた。

理不尽な言いがかりを自分で対処しようと、法律を学ぶうちに、どうせなら弁護士になろうと思いつい始めたのだ。

……それなのに、何より大切だと思っていた彼女を、自分を信じ続けてくれた彼女を……自分は信じなかつた。

下らない写真の方を信じ、泣きながら身の潔白けつぱくを訴える彼女を信じる事なく……捨てた。

後から知つた事実に、後悔しない日はなかつた。

弁護士になつてからも、面倒臭い状況になるのは、すでに日常だ。自分に近付いて来る女は、大体において俺を弁護士とは見ていない。肩書きのあるホストだ。

忙しい時間に事務所に押し掛け、隣りに座るよつに強要。別に悩んでいる訳でもないのに、晩ご飯のメニューは何がいいかしら?など、つまらない相談を持ちかけて来る。

もちろん、三十分五千円の相談料はきつちり徴収する。

それでも、そういう輩が減る事はなかつた。

事務所の先輩である椎名薰しいな かおるは、「お金になるんだし、相手してやれば?」と簡単にいう。しかし、どんなに誠実に対応しても、離婚調停の席で、妻を唆したのはおまえだろう!となじられる。

実際に理不尽だ。

おまけに、梢の前でこんな醜態^{しうたい}…無様^{むよう}にも程がある。
——くそつ！

テーブルの上の本橋の手が、悔しそうに拳を作る。そんな本橋に、
梢は心配そうに眉を下げた。

「 もう…啓哉くんってば、聞いてるのぉ？」

フリル女は、本橋の心情などまったく気にする事なく、腕にしながら
掛かる。

もういい加減にしてくれ…そういう声に出しゃつとしたときだった。

「うわ…何この女。バカ丸出し。」

突然、張りのある女の声が、静かな店内に凜^{りん}と響いた。

アガシハ『モルヒーネの自分』（後編）

「うわ！何この女。バカ丸出し。」

一瞬、自分が口走ってしまったのかと焦ったが、今のは確かに女の声だった。

声がした方を見ると、まずクリーム色のコートが目に入った。そのまま視線を上げて行くと、緩く組んだ腕が続き、袖から覗く金色のブレスレットが手首の細さを強調している。

まるでケープのように肩に流れる髪は、店内の照明を受けて艶やかなキラメルブラウン。

眉の下で切りそろえられたボリュームのある前髪から覗く、アイラインで強調された瞳には、意思の強さが伺えた。

薄い唇に引かれたグロスや、ラインストーンが散りばめられた爪の先に至るまでまったく隙がない。

全てがキラキラとしていて、なんだか眩しく感じた。全身に近寄り難い雰囲気まで纏っている。

『ずいぶん迫力のある女だな。美人だし。』本橋は呆然と見上げた。傍らに立つたその女性は、信じられないといった表情で、全身フリルとリボンで飾り立てている女を見下ろしている。

フリル女が身につけている服は、それなりに名の通ったブランド物ばかりだ。しかし、それはすでに斎藤ちえの手によって無惨なカスタマイズを施され見る影もない…。デザイナーが見たら卒倒しだらうづ。

全員が呆気にとられていたところで、梢がいち早く我に返った。

「美枝子さん…！」

「はあーい！ 梢ちゃん！」

それまでの威圧的な雰囲気が一瞬で消え失せ、人懐っこい笑顔で席を立つ梢と抱き合つた。

身長一六〇センチの梢と並ぶと、彼女の背の高さが際立つた。

一七四：いや、一七五センチはあるだろうか。コートを纏つていても、彼女の線の細さがよくわかる。

スタイルもいいが、全体的に洗練された印象を受ける。

「……梢、この人は？」

我慢しきれず尋ねると、「あ、そつか！」と思い出したように向き直つた。

「紹介するね、彼女は柿崎美枝子さん。裕一郎さんのいとこなの」「……イトコ？」

「裕一郎さんの、お義父さんの弟さんの娘さん。」

「初めてまして。」

梢に向けていた笑顔は幻だつたかのように、無表情で本橋を見下ろす。

『この威圧的な雰囲気は、間違いなく柿崎家の血筋だ。』と、本橋は脳裏に威圧的な夫婦の姿を思い浮かべた。

「美枝子さん、こちらは私の大学の先輩で、弁護士の本橋啓哉さん。

今日ばつたり会つちやつて、「ふーん」

氷のような視線が本橋に突き刺さつて来る。その視線は、本橋の全身をくまなくスキャニングしているようで落ち着かない。こつそり

座り直した。

「…よ、よひしへ。」

さりげなく右手を差し出すと、美枝子はその手にチラリと視線を投げ、「どーも」と、指先だけの投げ遣りな握手を返した。その表情はやはり冷たい。笑つたらさぞ綺麗だろ?に…。本橋は少々残念な気持ちで小さな溜め息をついた。

「それにしても、エックリ! 美枝子さん、今日は遅くなると思ってたから…」

「あ~、うん。さつきはあんまり話せなかつたからさ、後を任せで帰つて来ちゃつた」

「…」めんね、打ち合わせしてたんでしょう?
「いひつていひつて?」

打つて変わつて梢には微笑む美枝子に、本橋は少しムツとした。

「それで、梢ちゃんに電話しよつと思つてたら、裕にいから電話が着てさ、梢ちゃんがこのお店にこりつていつから先にきたの」「そりなんだ」

梢はすこし複雑な表情で視線を落とした。

そんなやり取りをしていると、ウェイターが椅子とメニューを持ってやつて来た。

美枝子は、用意された席に座ると、縦長のメニュー表を開き、ロゼのスパークリングワインをグラスでオーダーし、他に、三種類のチーズと、チョコレートがかかつたプレッソウルをおつまみとして注文した。

ウェイターが立ち去ると、美枝子は氷が浮かんだグラスをとり一口

飲んだ。水は仄かにレモンの香りがした。

「ちょっとあんた！図々しいんじゃない！？」

フリル女は、細い眉を吊り上げ、耳障りなキンキン声をあげた。

「あ？何が。」

喉が乾いていたのか、水を一気に飲み干した美枝子は、小さなテーブルにさりげなく置かれている禁煙マークに僅かに眉を顰め、椅子の背に身体を預けた。

「お待たせ致しました。」

ウェイターがスパークリングワインのグラスと、チーズとプレッツェルの皿をテーブルに置くと、軽く会釈をして立ち去った。美枝子は待つてましたとばかりにグラスを取ると、梢のカップにカチンと当てて勝手に乾杯し口に運んだ。

くいっとグラスを傾ける仕草は実にエレガントで、本橋は無意識に目で追っていた。

「はあ、美味しい~」

美枝子は嬉しそうにグラスを目の高さに持ち上げ、ピンク色の液体の中の細かい泡を眺めると、それをテーブルに戻した。すぐ横では、でかいリボンを着けた女が鬼の形相で美枝子を睨んでいる。

美枝子は素知らぬ顔で皿に手を伸ばす。四角くカットされ、楊枝が刺さったチーズを一つ摘み上げ、それを美味しそうに口に運ぶ。

「…ちょっとアンタ。居座る気？！」

フリル女は、身を乗り出して美枝子を睨む。当の彼女は、チョコレ

ートがかかったプレッソエールをポリポリ食べている。梢はハラハラしながら一人を見くらべ、本橋は物怖ものおじしない美枝子に興味を持った。

「ちょっと、聞いてるの？！」

エレガントにグラスを傾ける美枝子に、フリル女はテーブルを叩いて声を荒らげた。

「空氣？ 読んでないのはアナタの方でしょう？」

「どうしてよ！」

店名が金字で刻印されたペーパーコースターにグラスを戻すと、長い脚を優雅に組んだ。

「いい？ 彼は、こちらの女性と一緒にだったのよ？ そこに割り込んだのはアナタの方でしょ？」

見てたんだろうか？ と思ったが、美枝子と目が合ひ、本橋は黙つて頷いた。

フリル女は得意げに「いい？ よく聞きなさい！」と胸を張つた。

「私たちは前世から結ばれる運命なの！ だから、私は啓哉くんと一緒にいなきやいけないの！ この女の方が彼にちょっとかい出してるんじゃない！」

前世まで飛び出して、本橋は文字通り、開いた口が塞がらない状態になつた。

フリル女は未だに意味不明な発言を繰り広げているようだが、すでに理解の範疇はんちゆうを越えていたため、全員が話を聞いていなかつた。

「ちよつとー、アンタ聞いてるの？…」

「……え。」

いきなり指を刺され、話を聞いていなかつた梢は、返答に困り、視線をカップに落とした。

「ほら！ 反論しないでしょ！ これが証拠よ！」

「……彼女はいま妊娠してるんだ、変な事に巻き込まないでくれ」

本橋が宥めるようにそう言つと、フリル女は衝撃を受けたよ、元つ青になつて頭の上のリボンを揺らしている。

「こ…こ…ん…しん…ひ…啓哉くんの？」

面倒だから「そうだ」と言いたかつたが、異を唱えたのは美枝子だつた。

「そんな訳ないでしょ。彼女には立派な旦那がいるわよ」

「まああーー夫のある身で他の男に会うなんて！…」のふしだら女つ！」

梢の肩が怯えたように震えた。そんなつもりがなくとも、周囲にはそう見えるのだろうか。

梢は以前からあらぬ誤解を生まないよつ気を付けて来たのに、結婚し気が緩んだのかもしれない…梢はレモネードのカップを両手でぎゅっと握つた。

「アンタね！ 言つていい事と悪い事の区別もつかないわけ？！ 幼稚なのはその格好だけにしきなさいよ…？」

「なつーなんですかー！」

フリル女は両手でテーブルを叩くと勢い良く立ち上がった。

「アンタ……無礼罪で訴えてやるー。」

「それを言つなら、侮辱罪でしょ」

「——うつー」

真っ赤になつて立ち尽くすフリル女に田もくれず、美枝子は美味しにワインを口に運ぶ。
とりあえず、矛先を梢から引き離すことに成功した。だが、梢の表情は浮かない。

「……斎藤さん。貴女がどう思つていらっしゃるか不明ですが、俺：いや、私は斎藤さんとお付き合いしてゐつもりはないですし、これからも付き合うつもりもありません。今の梢に対する言葉を撤回し、謝罪していただきたい。」

本橋は苛立ちを押さえ、じつに弁護士らしい態度で全身フリルの女に語つた。

自分を庇つてくれると思い込んでいたフリル女は、本橋の言葉にシヨックを隠せないようだった。

「…………啓哉くん…………」

フリル女はべそをかいたような顔で、本橋のコートの肘部分を揃んだ。

「なんだ本橋、女の趣味が変わったのか？」

背後から聞き覚えのある声が割り込み、全員が顔をあげた。冷えた外気の臭いと共に、嗅ぎ慣れた夫の香りにふわりと包まれる。梢の頬にヒヤリと冷たい頬が重なる。

「悪い、遅くなつた……」

「……裕一郎さん……」

項垂れた梢を背後から包み込んだのは、彼女の夫である柿崎裕一郎だ。梢は椅子から立ち上がり夫の胸に縋つた。

「……裕一郎さん」

「待たせて悪かつた……。」

「つうん……いいの。」

ヒシヒシと抱き合つたかと思つと、思い出したように妻の顔を覗き込んだ。

「梢、怪我は？ 痛いところはないのか？」

夫は妻の両肩を掴んだまま、全身を検分する。電話で一応、無事である事はわかつたが、やはり自分の目で確かめないうちには落ち着かなかつた。

今まで謂れのない針のむしろに座らされていた梢は、夫の顔をみてようやく笑みを浮かべた。

「大丈夫よ。ちょっと擦りむいただけだから」と、両の掌を見せた。裕一郎は、小さな手に顔を近づけ、傷を検分している。まるで警察

の鑑識のよつだ。

「ん。血も出てないな。まつたく…心配したぞ?」

「……『めんなさい』わたし、お仕事の邪魔…しちゃつて…」

しょんぼりと頃垂れる頭のてっぺんにキスを落とすと、大きな両手で小さな顔を挟み、顔を上げさせた。

「バー力。俺を誰だと思ってんだ?」

額を合わせて妻の目を覗き込むと、自信に満ちた顔でニヤリと笑んだ。

彼がそんな顔をするときは、大体において上手く行く。それは、梢が一番良く知っていた。

「社内一優秀で、世界一素敵な私の旦那様です」

「……褒めすぎ。」

真顔で言われ、照れ笑いをしたのは夫の方だった。妻をふんわりと抱き締める。

「…でも、ホントに気を付けてくれよ?おまえ、家の中でもそそつかしいんだからさあ」

「……ひどおい」

悪戯っぽく頬を膨らませる梢に、裕一郎は笑みを浮かべて唇を重ねた。

「あ~裕にい。言つとくけど、お店だからね。そこんとこ考え

てね。キスとか厳禁ね！って、聞いてる？」

無駄と思いつつ、抱き合つ一人に声をかけた。当然のよう^に返事はなかつた。

店内は一人に集中しているが、まつたくおかまいなしである。中には携帯を向ける者もいたが、熟^{こな}れたウェイターが三人ほどスマートに現れ、「撮影はご遠慮ください」と、まるで芸能関係者のよう^にテキパキと状況を裁いて行つた。

いや、ちょっと待てウェイター。本来注意するべきなのは、店内でいちゃつく一人の方だろ^う。

オーナーの社員教育はどうなつて^いるのや^う。

「……相変わらずつすね。柿崎サン。」

最悪な状況を開いてくれた救世主に、本橋はホッとしながら呟いた。

「おつそい！ 裕にい！」

「ああ、悪い悪い。」

頬を染めた梢を椅子に座らせると、ウェイターが椅子を持ってきた。小さなテーブルに五人は狭すぎるため、ウェイターがもう一つテーブルを寄せた。

「今日、オーナーいる？」柿崎が顎に細い髭を這わせているウェイターに声をかけると、「お呼びしてきます」と、会釈を残して立ち去つた。

「…………すてわ
「ん？」

出された水をぐつと飲み干した柿崎は、ハートを飛ばしていくフリル女と目が合つた。

『うわっ…やべえ…』本橋は冷や汗を浮かべた。

「あの…貴方は？」

頬を染め、目をキラキラさせたフリル女が誰何した。柿崎は彼女の出立時に、今始めて気が付いたようすで目を剥いていた。

「……柿崎です。」「下のお名前は？」
「……裕一郎」「まあ~」

本橋は嫌な予感がした。

フリル女は目を潤ませながら、柿崎の手を握った。

「やつと会えましたわ！私の王子様つ！
「はあ？？」

『やつぱりーー！』本橋は頭を抱えた。フリル女は見てくれのいい男が大好きなのだ。

本橋は冷や汗を浮かべながら、どうせつてこの場を切り抜けようか頭をフル回転させた。

「アンタの王子様つて、そこの弁護士じゃないの？」

美枝子はグラス片手に、呆れ顔で本橋に顎をしゃくってみせた。フリル女はキッと美枝子を睨むと叫んだ。

「啓哉くんは運命の人なの！裕一郎さんは、私の王子様なの！」

意味不明である。

「ゆ、裕一郎さんは私の夫ですっ！！触らないで！！」

それまで大人しく座っていた梢が、顔を真っ赤にしてフリル女から夫の手を引きはがした。

本橋も美枝子も、ましてや夫である裕一郎ですら、梢のそんな姿を一度も見た事がなかつた。

始めて見せた彼女のヤキモチに、柿崎はにやけてしまつ口元を右手で覆い隠している。

「なつ！何よアンタ！私と彼の間も引き裂こつていいの？！」

「裕一郎さんは私の夫ですっ！もう！触らないでっ！」

「彼はわたしの王子様よ！アンタこそ離しなさいよっ！」

「——きやつ！」

フリル女が力任せに梢を突き飛ばした。梢の華奢な体が、弾かれるようによろけた。

「あぶなつ——！」思わず腰を上げる本橋の目の前で、彼女を支えたのは、彼女の夫だった。

男の胸が、軋んだ気がした。

「——あ、危ないだろ？——彼女は妊娠してるんだ！」

「……」「ごめんなさい……」フリル女は素直に謝つたが、視線は柿崎を見詰めている。

「梢、大丈夫か？」

柿崎は腕の中に収まつた妻を覗き込む。梢は驚いた顔をしていたが、直ぐに「大丈夫よ」と笑みを浮かべた。そのまま抱き合つ二人から、本橋は視線をそらした。

「……ところでアンタさ」

ワインを飲み切つた美枝子が、ウイスキーのロックを追加しながらフリル女に声をかけた。

「……なによ。」フリル女は口を尖らせた顔で振り返つた。抱き合つ二人が羨ましいのだろう。

美枝子はもう一人複雑な顔をしている男を目の端にとらえながら、プレッツェルを摘まみ上げた。

「店の前に高級ブティックの紙バッグが三つ置いてあつたけど、あれアンタのじゃないの？」

「え？ あつ！ あれ？ あれ？」

フリル女は思い出したように自分の両手を見てから、周囲を見回すと「そういえば……」と記憶をたどる。

店の外から本橋を見付け、嬉しくて荷物を放り出して手を振り、そのまま店に入つた……。

ショーウィンドーの向こうでは、数人の若者が紙バッグの中を物色していた。

女は全身のフリルを揺らしながら店を出て行つた。驚いた若者たちは、紙バッグを掴むと走つて逃げて行つた。必死に後を追うフリル女の絶叫が、賑やかな街の騒音の中で、次第に遠のいて行つた。

「あゝ煩かつた。」

美枝子は肩にかかる髪を後ろに撥ね除け、新たに追加された琥珀色の液体に口を付けた。丸く削られた氷が、グラスの中でぐるりと回転する。

新しいペーパーコースターにグラスを置くと、妻をキスで翻弄して
いる従兄の背中を叩いた。

「裕にい、いいかげんにしなよ！？」
「相変わらず節操なしだな！柿崎サンは！？」

本橋がテーブルを叩くと、グラスやカップが僅かに跳ねた。

「……だつてさ、梢があんな風にヤキモチ妬いてくれたんだぜ？嬉しいに決まつてんじやん？」

珍しく頬を赤らめた柿崎が、照れたように言い訳をしている。梢は

その腕の中で皿を潤ませていた。

「まつたく……」

本橋はもはや笑うしかなかつた。

「さて、梢の顔色が悪いから、もつ帰らひ
「……血色良さそうだけど？」

本橋がさりげなく皮肉るが、柿崎は全く氣にしていない。
梢を支えて立ち上がると、美枝子はぐつとグラスを煽り、残りのチ
ーズを頬張つて席を立つた。

ウェイターがさりげなく近付き、柿崎に伝票を渡すと、柿崎はカ
ードで支払を済ませた。

その時、一人の壮年がやつて來た。

「やあやあ！柿崎君！久しぶりだね～！
「ああ！松山さん！お久しぶりです～！」

白い口ひげを生やした品のいい壮年は、にこやかに柿崎と握手を交
わす。

白い物が混じつた髪を七三に自然な形で流し、後ろの髪は一本に結
ばれている。スレンダーな身体に、黒いベストと細身のスラックス
が実に良く似合う。糊の利いた白いシャツの襟元にはスカーフタイ
が巻かれていて品がいい。

「松山さん、妻の梢です。梢、俺に仕事を教えてくれた大先輩の、
松山英晴さんだ。」

「はじめてまして、梢です」

「松山です。ようやくお目にかかれた。」

松山の手は節が目立つが、力強い手をしていた。笑うと頬と目尻に皺がよつたが、それが彼の品の良さを際立たせている。

松山は、柿崎がまだ新入社員の頃、仕事のあれこれを教え込んだ人物だ。

ある意味、現在の柿崎裕一郎を作り上げた張本人ともいえる。嘗ては、相当な切れ者として、上層部に恐れられていた。いまは、その立場も柿崎が引き継いだ形になっている。

当時、定年を間近に控えていた松山は、柿崎が大きなプロジェクトを成功させたのを見届けると、早期退社して、兼ねてからの夢だったこの店をオープンさせた。店名のシモンズとは、彼の好きなイギリスの詩人からとった。

柿崎は「ことあるごとに店を尋ねては、松山と酒を酌み交わしていた。

「やつと紹介できました」柿崎は自慢げに胸を張る。

「ふつふつふつ。柿崎君が必死になつて猛アタックした女性を、一目見たかつたんです」

「…え？」

梢の顔がかあつと赤くなり、隣りに立つ夫を見上げた。裕一郎は照れくさそうに頭を搔いていた。

「ちょっと強引だったみたいだけね」と、美枝子が茶々をいれる。

「み、美枝子！」

「はつはつはつ！ 今度じっくり伺わないとね」

「ま、松山さん…」

滅多に見られない柿崎の狼狽ぶりに、松山は声を上げて笑った。屈託のないその笑顔に、美枝子は頬を染めて見湯れている。

「さて、松山さん、また今度ゆっくり伺います」

「梢さん、いつでもいらして下さいね」

「はい、ありがとうございます」

三人が暇いとまを告げるのを、本橋は椅子に座つたまま眺めていた。居たたまれず、コーヒー カップに視線を落とすと、カップを回して中の液体を揺らした。

「おい、本橋。おまえは来ないのか？」

「――へ？」

思いがけない言葉に、本橋は間抜けな声で顔を上げた。

柿崎は当たり前のよう自分に声をかけてくれた。なんだかそれが、無性に嬉しかった。

「おまえが梢の傍にいてくれたお陰で、俺はすぐ安心したんだぜ？」

？」

「…俺も…いいの？」

「何か予定でもあるのか？」

「な、ない。」

「なら来いよ。飯ぐらいい食わせてやるぞ」
「行く！」

本橋は顔を輝かせて立ち上がると、重いカバンを持ち上げた。
不本意そうな美枝子の顔には、あえて気が付かない振りをして、先
を歩く二人の後を追つた。

その5へ 『あたたかな家』

マンションは、都心から電車で約一時間ほどで、駅から徒歩十分
という場所にあつた。

群青色の空に聳えるそれは、各部屋に灯りがともつてゐる。

敷地を囲むように生け垣が植えられ、丸い電灯が等間隔に取り囲んで
いる。

マンションの横手に車が回り込むと、地下駐車場への入り口があ
つた。入り口にはゲートがあり、バーが降りていた。

柿崎は、腕を伸ばして機械に専用カードを差し込み、部屋番号を入
力すると、白と黄色のバーが跳ね上がる。シルバーのワンボックス
は、ゆっくりと奥へ滑り込んでいく。

側溝を塞ぐ鉄板が、車の通過に合わせてガタンと大きな音を立てた。

通路には、一方通行を知らせる白いペンキが、矢印の形で書かれ、
フロアの壁にはアルファベットと数字がペイントされ、さながら秘
密基地のような空間だと、本橋はスマートガラスの内側でそう思つ
た。

駐車スペースに停まっている車は、多くはファミリーカーで、中
には高級車も幾つか見受けられた。それらは、前を向いていたり後
ろを向いていたり斜めになつていたりと様々だ。

それらの間を、シルバーのワンボックスが滑るように進み、D一
七とペイントされたエリアに行き着いた。

一つのエリアは約十六台分の駐車スペースがある。その壁側で、中
央より左側に車を寄せた。大きく七と白いペンキでペイントされて

いる枠内に、大きなワンボックスが、後ろ向きで滑らかに停車した。

柿崎は助手席で眠ってしまった妻に声をかけた。車に常備してある膝掛けが、顔の半分を覆っている。それをそつと捲つて唇にキスすると、梢が目を覚ました。夫は、妻の起きぬけの顔が好きだつた。もう一度口付けようと顔を寄せると、妻の手がやんわりとそれを遮つた。

「ん？」

「……梢、ついたで」夫の顔は、少々残念そうである。

「うん……」

よほど疲れていたのか、だるそつに体を起こすと、のろのろと車を降り、荷物を肩に掛けるとドアを閉めた。

横のスライドドアが開き、美枝子と本橋も降りた。道中、二人は一度も言葉を交わすことなく、視線を合わせることもなかつた。

未だふわふわしている梢を支えるように、美枝子が寄り添つた。

「梢ちゃん、大丈夫？」美枝子が心配そつに声をかけると、「大丈夫よ」と微笑んだ。

二人は寄り添うように立ち、男たちが荷物を降ろすのを待つていた。どこかぼんやりとしている梢の額に、美枝子が手を当てた。

「熱はないみたいね」

「ありがとう、風邪じやないから大丈夫。赤ちゃんがてきてから、すこく眠くて……」そういうつて、口元を隠しながら、また小さな欠伸あくびをこぼした。

「そうえいば、美奈子もそんなこと言つてたよくな……」美枝子は、一児の母となつた三つ下の妹が、やはり欠伸あくびばかりしていたのを思い出した。

車の後部から、食料品が詰まつたエコバッグを幾つか下ろしていた柿崎は、忘れ物はないかと車内をざつと見回してから、ハッチバックドアをバタンと閉めてドアをロックした。コンクリートの駐車場内に音が反響する。

「そういえば、梢はどうして休んでたんだ？」

本橋が訪ねると、柿崎は少々複雑そうに苦笑いを浮かべた。

「ああ、今日は体調が悪そuddたから休ませたんだ。」

「ああ、そうなんだ」

さつきみた、母子手帳のことを思い出し、美枝子と談笑している梢を見た。やはり、まだ信じられない気持ちだった。

妊娠なんて、正直に言えば男の自分にはよくわからない。この頃、妊娠絡みの相談が増えていることを思い出した。その大半が、認知をしてくれない不義理な男から、養育費だけでも取りたいと怒る若い女たちだつた。そしてもう半分は、女から身に覚えのない子供の認知と、結婚を迫られたと訴える妻帯者。中には本当に潔白だった男もいたが、残りは叩けば埃が舞い上がるような連中だった。

妻だけを想い、これでもかと尽くそうとする柿崎を見て、自分ではこんな風に死んでやることはできないなど、誰かの車の後部座席から、何かを問い合わせるように見詰めるぬいぐるみに視線をむけた。

柿崎は話しを続ける。

「同じ部署だからまだマシなんだけど……梢はホントにそそつかしいんだ……お人好しだし……」

「……」

仕方なさそうに笑う顔に、彼の苦労が目に見えるようだった。
事務は常に座りつ放しなわけではない。書類を「ペーし、それらをまとめて会議室に運んだり、當業が使う資料を整えたりと、仕事は多岐にわたる。

夫にしてみれば、何もないところで躊躇^{つまづ}したり、残業を安請^{やすう}け合いしたりする妻に、気が気ではないだらう。

柿崎は、エコバッグの一つを左肩に掛け、その手にもう一つ袋を持ち、右手には通勤カバンを持った。

本橋はもう一つ残ったエコバッグを右手に持ち、何が入っているやら、資料が詰まつた自分のカバンと変わらない重さに驚いた。

「本当なら、妊娠がわかつた時点で退職させたかったんだが、いくら話し合っても平行線でさ……」

「……ああ、梢、頑固だもんな……」

本橋は同情するように頷いた。昔から、こうと決めたらなかなか折れないのだ。それで喧嘩になることもあつたな、と目を細めた。

「で、結局は【無理をしない】【残業はしない】とか、あれこれ約束させて、仕方なく認めたんだ……」

力なく溜め息をつく柿崎が、実はそれほど困っている様子がないことに、思わず苦笑する。

「なんだかんだ言つて、尻に敷かれてるんじゃないのか？」本橋がからかう。

「尻に敷かれるのも、悪くないぞ？」と、真顔で言つ。

「ケツ、惣氣のうけでやがる！」

「バレたか

戯おどけたように舌を出す柿崎に、本橋は苦笑いをし、待ちきれず、「まだ？」と催促する美枝子と、ニコニコと笑つてゐる梢の後を追つて、駐車場から屋内に通じてゐる自動ドアに向かつた。梢が、カードを差し込んでロツク解除のボタンを押すと、磨りガラスの自動ドアが開いた。暖かい空気がふわりと頬を撫でる。

マンションは、ホテルのような設えで、入り口横にはカウンターがあり、奥には管理担当が一四時間常駐するための部屋となつてゐる。

エレベーター前の広いエントランスには応接セットが三組置かれ、天井まであるガラス窓の向こうには、住人だけが利用できる気持ち良さげな庭が広がつてゐる。

木々や遊歩道や池がライトアップされ、暗闇に浮かび上がつてゐる。各ライトには、それぞれソーラーパネルが取り付けてあり、昼夜に蓄電ちくでんされたエネルギーが利用されていた。

セキュリティは、入り口のオートロツクだけでなく、郵便受けがボックスタイプになつていて、外側から不正に郵便物を取り出すことはできない仕組みになつてゐる。また、取り出す際は、住民がオートロツクの内側から部屋の鍵で解錠する。大きな荷物などは、入り口横にある管理人詰め所で一時預かりしてくれた。

これだけの設備でありながら、二LDKで家賃が六階までなら三十五万程で、駐車場代は一台五千円は、なかなかないと柿崎が豪語する

ので、本橋はつい笑ってしまった。

柿崎は、夫婦で新居の下見に来た際、部屋だけでなくセキュリティーや細かなサービスに至るまで気に入り、もっと安いところでいいと渋る妻を説き伏せて入居を決めた。住み始めて一年が経った頃、梢が妊娠した。

出産や育児にお金がかかると気にしていた梢だが、夫に「問題ない」と自信に満ちた笑顔でいわれれば、もはや彼女に異議を唱える術はない。予定日ギリギリまで勤めたいと言つたのは、少しでも家計の足しにしたかったからだ。

しかし、梢が思つていた以上に、マンションの住み心地は快適だつた。

マンションの三階には、プレイルームを兼ねた託児所があり、二人の保育士が最長二十時まで子供を預かつてくれる。プレイルームの隣りには、自動販売機が置かれた休憩所まであり、子供が遊んでいる姿を見ながら、母親たちが情報交換できる社交場ともなつていた。

八時を少し過ぎた時間だが、エントランスにはまだ数人が庭を眺めながら談笑していた。

管理カウンターには誰もいなかつたが、呼び鈴の横のホワイトボードには、【お荷物をお預かりしております】の文字の下に三件分の部屋番号が手書きで記されていた。

四人は無人のカウンター前を通り、エレベーターのボタンを押した。

箱が到着するまでの間、美枝子は梢と楽しそうにお喋りし、本橋は柿崎と近況を簡単に報告しあっていた。

ほどなく扉が開くと、中からスーツを着た五十代後半と思しき男が、同じくらいの年の女と寄り添うように降りて来た。端から見ても、夫婦には見えないな。と、本橋はさりげなく眼鏡を押し上げる振りで様子を伺つた。

中年の不倫の場合、離婚が拗ることが多い。妻が夫の不倫相手に慰謝料を請求する場合も珍しくない。慰謝料や資産分与となれば、少しでも多く取りたい妻に対し、金を払いたくない夫は、妻の素行をなじるなど、まさに泥沼と化すのだ。

（…そいいえば、次の離婚調停の依頼主も、あのくらいの年齢だな…）本橋の眉根が寄る。

一瞬のうちに仕事モードに陥つた脳内で、仕事の段取りが組まれていぐ。そんな勤勉な弁護士の思考を断ち切るように扉が閉まる。我に返つた本橋を乗せたエレベーターがゆっくりと上昇を始めた。

そのまま六階までは、一度も止まることなく、スムーズに到着した。

エレベーターを降りると右に曲がり、三番目の部屋が彼らの部屋だつた。シルバープレートの表札には、六、七と部屋番号が記され、その下にはアルファベットでKAKIZAKIと書かれたプレートが差し込んであった。

梢がバッグを探り、黄色いクマのマスコットと大きめの鈴がついた鍵を取り出してドアを開けた。

暗い玄関にしLED仕様の灯りをつけると、暖色系の灯りの元に白いシユーズクローケの扉が出迎えた。

廊下にはグレーのカーペットが敷かれていて、一人の色違いでお揃いのスリッパが仲良く並んでいる。

先に上がつた梢が、クローケ横に置かれたスリッパラックから、来客用のスリッパを取り出しこつ並べた。

「さあ、入つて入つて！」

「おじやましまーす」

靴を脱いでスリッパを履き、コートを着たまま、梢に着いて廊下を進むと、突き当たりがリビングのようだつた。

曇りガラスが嵌つたドアを開け、手探りで部屋のスイッチを押した。暖色系に統一された落ち着いた雰囲気のリビングダイニングが姿を現す。エアコンのスイッチを入れると、天井に嵌め込まれた吹き出し口から、速やかに暖かい風が吐き出された。

「いい部屋だね」と、本橋は、両手に荷物を持ったまま、ぐるっと部屋を見回した。

「ああ本橋、それこっちに頼む

「おう」

声をかけられ、柿崎の後に続いてキッチンに入った。入り口にキャンパス地のエプロンが二つ引っ掛けであつた。

赤が印象的なシステムキッチンは、すっきりと整頓されていて、ともすると生活感がないほどだ。

本橋が荷物を渡すと、裕一郎が大型冷蔵庫にパズルのピースを嵌め込むように、テキパキと正確に食材を納めていく。相変わらず几帳面だ。

「直ぐに飯にするから、すこし待つてろ」

「はいはーい」

本橋はほくほく顔でキッチンからリビングに移動した。リビングは七畳半ほどの広さで、カウンターの向こうがキッチンという配置だ。

以前のマンションで使っていたテーブルセットがそのまま置かれていて、本橋は、なぜかホッとした。

テーブルセットの反対側には、見覚えのある形のソファが見覚えのある角度で置かれ、その上に薄い柄が入った目新しいカバーがかけられていた。

ソファとテレビの配置だけは、以前と同じだと、本橋は思った。

しかし、以前と格段に違うのは、もちろん間取りがどうというのではなく、シンプルで使いやすさ重視だった柿崎の部屋に、女性らしい暖かみが加わっていることだらう。写真立てやマスク Gottなどが飾られ、そこかしこに梢の気配が満ちている。

「裕一郎さん、先に着替えたら?」

「ああ、そうだな。」

「私、一人にお茶を出してるから」

「ああ、上の棚に新しいコーヒーの袋があるから、それを出してく

れ

「はい。あ、裕一郎さん・・・」

一人の何気ない会話が、彼らを夫婦だと再認識させる。奥の部屋から聞こえる一人の笑い声や、タンスを閉める音、スリッパが歩き回る小さな音まで、つい耳をすませてしまう。本橋は、なんだか盗み聞きしているような恥ずかしさがこみ上げて来た。

この部屋に来るのが一度目の美枝子は、冷蔵庫から勝手にビールを取り出し、所在無さげにつるつるする本橋を眺めていた。

「……座つたら?」

「え、あ…うん。」

本やDVDが並ぶ棚の前で、写真に見入っていた本橋は、僅かに動揺したように振り返ると、眼鏡を押し上げ、そわそわとソファに腰を下ろした。美枝子はその様子を、ボリュームのある前髪の奥で観察している。

男はじつと、テレビの前に置かれた二人の写真を眺めているようだつた。美枝子からは、彼がどんな表情をかかれていたのかみえなかつた。

丸いフォルムのコーヒーメーカーから、香ばしい香りが立ち上ると、来客用のカップに注ぎ、本橋の前に置いた。美枝子はすでにビールを飲んでいたので、軽く摘めるようなものをテーブルに置いた。

「ありがとう」
「どういたしまして」

ふふふと笑う梢に、本橋も目を細める。

「梢も着替えてこいよ」

寝室から戻った裕一郎は、ダークグレーのカットソーにジーンズという格好だった。ヘンリーネックのボタンが一個はずれていて胸元がチラリと見える。梢と並ぶと、その先を想像してしまい、なんだか生々しく感じた。

「え？このままじゃダメ？」梢が小首を傾げると、裕一郎も柔らかい笑みを返す。

「そのままでいいが、膝に泥がついてるぞ？」

「あ…」

言われて思い出したのか、慌てて自分の膝を覗き込み、顔を赤らめた。

「柿崎サンの奥さんは、巧みに【受け身】を取つたらしいからね」と血面に「一ヒーを噛る。

「……受け身、ねえ？」裕一郎は、指で自分の顎を撫でながら、溜め息をついた。

「……梢ちゃんつて、スポーツとかダメそうだもんね……」美枝子までが残念そうに溜め息をついた。

「失礼ねつ！」と、梢は膨れつ面になり「着替えて来る。」と、足早に寝室へと入つて行つた。

「……すねちゃつた？」美枝子が心配そうに裕一郎を見ると、「丈夫だよ」と余裕に笑つた。

裕一郎は、スリッパが煩わしかつたのか、裸足のままキッチンに入つて行つた。
すぐに冷蔵庫から材料を幾つか取り出ると、さつそく料理に取りかかる。

「ねえ、裕一郎さん、これなあに？」
「おまえ、またそんな薄着で！」

裾がくしゃつとしたレギンスをはき、薄いカットソーの上に、すっぽりと大きなセーターを着た梢が、リボンがかけられた大きな袋を持つてやってきた。夫はニンジンの皮むきをしていた手を止めた。

「ベッドの上にあつたんだけど…」

「ううん、とりあえず、座れ。」

裕一郎は梢の両肩を押してソファに行くと、本橋はカップをもつたまま席を譲る。開いた場所に座らせると、極太の毛糸で編まれた、手編みのストールで梢の肩を包んだ。（ちなみに、このストールを編んだのは舅である。）ピンク色の膝掛けで膝をガツチリ包むと、改めて袋を妻に手渡した。

「開けて」

首を傾げつつ、包みを開けた。本橋と美枝子も、その様子に見入った。

梢はガサガサいう袋を覗き込むと、ピンクというより桃色と言つた方がしつくりくる色の、なにやらもこもこしたものが入つていた。中身をまとめて膝の上に引っ張り出してみた。

「わあかわいい！」

出てきたのは、モコモコした緩い腹巻きと靴下。妊婦用のむくみ対策タイツに、ネックウォーマーだ。

「・・・柿崎サン、なにこれ？」

本橋は、不思議そうにモコモコした桃色の腹巻きを摘みあげた。妻への贈り物に腹巻き？そんな言葉が顔に書いてあつたのか、裕一郎が真剣な顔で妻の前に座ると、まだ膨らみのない腹に大きな手を乗せた。

「俺にできることなんてほんの僅かだ。出産は、梢がたつた独りで

頑張るんだ…。だから、少しでも役に立ちたくてさ・・・

よくできた夫である。

「裕一郎さん・・・ありがと」

梢がふわっと夫の首に腕を回すと、裕一郎が優しく妻を抱きしめた。

「お決まりのキスシーンが・・・

ぐひゅ…ぎゅぎゅぎゅ…

せつかくの甘い空氣を妙な音が邪魔をした。

三人が音がした方をみると、赤い顔をした美枝子が、薄い腹を押されて苦笑いしていた。

「・・・えへへ、さつきのお店のチーズじゃ、やっぱり足りないみたい・・・」

苦笑いしながらも、腹は空腹を訴え、切なく鳴いている。

「やれやれ、ちょっと待つて」

甘い一時に水を差され、半田になつた裕一郎だが、すぐに立ち上がってキッチンへと向かつた。

柿崎家は相変わらず夫が食事を作っている。いや、梢も料理はするのだが、過保護な夫が作りおきしたものを、レンジで三分から五分温めるだけという簡単さで、料理とは言えないと思っているのだが、

夫の料理の方が美味しいので、複雑な気分だ。しかも、妊婦にやさしいレシピをネットで調べたり、本を買ってきたりして、弁当からおやつまで、すべて手作りといつ懲りよつなのだ。

「あ、あのさ・・・その・・・俺も、お腹触つても・・・いいかな？」

本橋が遠慮がちに裕一郎に声をかけると、キャンパス地のエプロンをつけた裕一郎が、野菜を洗いながら「俺は構わないよ」と笑った。

「梢・・・いいかな？」

おずおずと訪ねると、梢もまた、笑顔でうなずいた。

彼女の足下に跪き、まだ平らな腹に恐る恐る手を乗せた。

「まだ、全然わからないけどね」
「・・・うん・・・でも・・・」

目を閉じた本橋は、載せた右手に意識を集中する。無意識に息を止めている。

本当に、ここに赤ん坊がいるのかと疑いたくなるほど、彼女の腹部には丸みがない。それでも、梢の穏やかな笑顔を見上げると、それが本当なのだとわかる。掌から体温とは違った温もりを感じた気がした。

本橋の目から自然に涙がこぼれた。

ぱうぱうと、溢れた涙は、本橋の頬を伝い、スースに染み込んでいく。

様々な感情が男の中で逆巻く中、それ以上に、全てを赦してくれた

梢や、本当なら近付くことすら許されない立場の自分を、こつして家に招き入れ、尚かつ、大切な母体に触れさせてくれる一人の優しさに、本橋は余計に涙が止まらなかつた。

付き合つてゐる時でさえ、本橋の涙など見たことがなかつた梢は、眼鏡が濡れるのも構わず涙する姿に驚いた。

「……啓哉？」

「……いや、なんか俺、感動しちゃつて……」

本橋は眼鏡を外し、照れくさうに涙を拭つた。

そんな本橋の様子をみていた美枝子は、冷蔵庫からもう一本ビールを取り出しながら裕一郎に小声で尋ねた。

「ねえ、あの弁護士、梢ちゃんにちよつとなれなれしくない？」

「ああ、あいつは、梢の大学時代の元彼だ」

「はあ？！」

裕一郎は手際よくボウルの中身をコネてこべ。ビーフやハーブ、ユーはハンバーグのようだ。

「よく平氣だね？」

「あ？ なにが？」

「だつてさ、もし梢けやんとよつと戻しちゃつたらとか、考へないの？」

「梢によそ見をさせる隙は『えなこよ』。自信満々に『やつと笑む』。『男と女に、そんな理屈が通るのかしらね。』」

美枝子が至極もつともなことを言つた。

裕一郎は大きな手で具材を小判型に丸め、ペチペチと両手の中で踊らせ空気を抜いて行く。

「本橋は、みてれがあんなら、よく誤解されるけど、根は眞面目でいいやつだぜ？」

「信用しそぎじやない？」

「俺も梢も、本橋を信頼してるし、本橋も、その信頼を壊すような奴じやない。」

「どーだかね」

おもしろくなさわうにぐびつとビールをあおる美枝子に、裕一郎は仕方なさそうに肩をすくめ、巨大なハンバーグを二つ、普通サイズを二つ、ついでに弁当サイズを四つこさえていった。

すでに三本目のビールに手を着けている美枝子は、缶を片手に床に座っている男を睨む。

本橋は、腹部を触っていた手を見詰め、それを大事そうにポケットに押し込んだ。

「ねえ、アンタさ

「しー。」

美枝子が声をかけると、本橋が左手の人差し指を、笑みの形をした唇に当てた。

見ると、当の妊婦はソファの背に頭を預けてスヤスヤと眠っている。

「…裕にい…ちょっと…」美枝子が小声で裕一郎を呼んだ。

「ありや、寝ちゃつたか？」

付け合せの準備をしていた裕一郎は、手を洗うと、リビングの隣の部屋から大きなクッションと、厚手の毛布を持ってきた。

「会社でもさ、パソコンの前でたまにウトウトしてんだ」

そういうて笑う裕一郎の顔は、より優しくなった気がする。クッションをソファの端に置き、梢を起こさないように抱えると、そつと横たえさせ、肩まですっぽりと毛布でくるんでもやつた。

「相変わらず、過保護だね

「そうか？」

軽口を叩く本橋に、不思議そうな顔で裕一郎が片眉をくつとあげた。

「ベッドに寝かせた方がよくない？」

ソファの後ろから美枝子がのぞき込む。梢は気持ち良さそうに眠っている。

「いいや。ここでいいんだ。」

「風邪ひかない？そりや、暖房もつこつこするけど……」

「まあ、見てな」

にやりと口角を引き上げた裕一郎は、困惑顔の二人を残しキッチンへ戻つていった。

やがて、ジューーーーと肉が焼ける音と、香ばしい匂いがリビングに流れてきた。

フード式の換気扇があつても、やはり美味しそうな香りは隠しきれ

ない。

「ん~~ ～いいにおい～ ～」

本橋は、犬のように鼻をヒクヒクさせている。その横で、美枝子の腹が賛同の声をあげた。

カウンターの向こうでは、一流シェフのように、一家の主^{あるじ}が動き回り、テキパキとディナーの準備を進めていく。やがて、テーブルの上が料理であふれた頃、エプロンをはずした裕一郎が、すこし大きな声を発した。

「飯だぞ！」

本橋と美枝子が、待つてましたとばかりに立ち上^{あが}ると、それまで眠っていた梢が、毛布をはねのける勢いでむくりと起き上がった。

「！！」

驚いている美枝子と本橋の横を、寝ぼけ顔の梢が、ふわふわと吸い寄せられるようにテーブルに近付き、当たり前のように夫の隣りに座つた。「な？」得意げに片目を眇めた裕一郎がおかしくて、美枝子と本橋がクスッと同時に笑いをもらした。

タイミングが合つてしまつたのが嫌なのか、美枝子がムスッと顔を
顰めた。

美枝子は梢の隣りに座りに、本橋はその正面にそれぞれ座つた。

「よし、じゃあまずは乾杯だ！ビールしかないけどな

裕一郎は、テーブルに用意した三つのグラスにビールを注ぎ、妻のグラスにはノンアルコールの赤いカクテルを注ぐと、自分のグラスを持つて立ち上がった。「ほん」と、わざとらしく咳払いをする。

「美枝子プロデュースの新店舗の開店、おめでとうー」裕一郎が、張りのある声で言祝ぐと、梢も嬉しそうに「おめでとうー！美枝子さん！」とグラスを片手に祝いを述べた。

本橋も、初対面の美枝子に「おめでとう」「わいこまわす」と、にこやかにグラスを上げた。

「ありがとうー！つていつても、オープンは一週間後なんだけれどね」美枝子は、頬を染めながら嬉しそうにビールを口に運んだ。

「それから、もう一つ。」裕一郎は本橋の方を向いた。

「ん？」グラスを口に運ぼうとしていた本橋のグラスに、裕一郎がカチンとグラスを当てた。

「友人との再会を祝して」と、片目を眇めてみせた。

「……え？」

思つてもいなかつた言葉に呆然と裕一郎を見返すと、正面に座る梢もまた、嬉しそうに笑顔でグラスを差し出した。今の言葉は、本当に自分に向けられたものなのか、よく理解しきれなかつたが、おずおずとグラスを差し出すと、梢と裕一郎の二人が、カチンとグラスを当てた。

「……あ……ありがとうございます……」未だ信じられないといった面持ちながら、本橋はよしやく礼を返した。

だが、美枝子だけは、胡散臭うさんくさそうに本橋を一瞥いちべつし、あとはそっぽを向いてグラスを仰いだ。

「それじゃ、いただきます！」

裕一郎が先頭を切つて両手を力強く合わせると、皆それにならつて同じ仕草をし、食事を始めた。

「ん～～～～うめ～～！」本橋の嬉しそうな声がすぐさま上がった。

大きなハンバーグは、厚みがあるのに中までしつかり火が通り、いい感じに焼き色が入つたボディにナイフを入れれば、たっぷりの肉汁が溢れ出す。裕一郎特性ソースがこれまた絶妙で、本橋だけでなく美枝子もうつとりとなつた。

「俺、柿崎サンの作る飯が食いたくてさ～～」

感激に目を潤ませてパクパクと食べて行く。

「ふふ、裕一郎さんに胃袋掴まれてるんだもんね？」

梢がらかうように夫に視線を向けると、掴んだ覚えはないがなと、少々複雑そうな顔で苦笑いしていた。

久しぶりに味わう裕一郎の手料理は、以前よりも腕が上がった気がする。巨大なハンバーグは、付け合わせの野菜もろともすごい早さで本橋の胃袋に消えて行く。美枝子も、時折ビールで喉を潤しながらハンバーグに舌鼓を打つた。

シェフは、満足そうに見渡すと、隣の席で美味しそうに食べている

妻の姿に田を細め、大きく切つた一切れを口に運んだ。

「そりいえば、梢は、つわりとかないの？」

見事なまでの食欲に、本橋は人参をフォークの先に刺したまま、ほつぺたを膨らませて、妊婦に話しを振った。

「うん、平氣▽」

「なんでも、食べ悪阻つわりとかいうらしい」

「食べ悪阻？」美枝子が飲み終えた空き缶をカウンターに乗せた。

「ああ。胃が空になると、吐き氣吐き気とか起こすんだ。だから、何か食べてると楽なんだそうだ」

「ふうん」

美枝子が五本田のビールのタップをプシュッと起こした。

「・・・美枝子、ペースが早いぞ」

「これが、フ・ツ・ウ・な・の。」

裕一郎が従姉妹いとこを窘めるが、美枝子は涼しい顔でアルミニ缶を傾ける。グラスが煩わしくなったのか、缶に直接口を付け、グビグビと飲んだ。彼女の鱗蛇伝説は今も健在である。

その見事な飲みっぷりと、まったく酔つたような様子がない美枝子に、本橋は感心しながら声をかけた。

「美枝子さんはお酒が強いんですね」

本橋がそう言つと、美枝子はムスつとしてそっぽを向いた。

どうも彼女に嫌われているらしい。本橋は初対面の女性から、異様なまでの好意を向けられるか、美枝子のように、よくわからない反感をぶつけられることが、ほぼ口常となっていた。まあ、後者のほうが面倒がなくていい。と本橋はプロッコリーを頬張った。

目の前の美人よりも、男の手料理に夢中になってしまっている自分に、我ながら呆れた本橋だつたが、旨味が口いっぱいに広がつてゐることの至福の時を、存分に堪能することにして、些細なことは頭の隅に追いやつた。

やがて、食事を終えると、裕一郎と梢は仲良く後片付けを始めた。冷えては大変だからと、彼女の役目は食器を拭く掛かりだつた。そんな、仲睦まじい一人を見ながら、食後のコーヒーを飲んでいた本橋は、コートを羽織つてバルコニーに出た。

六階から見る都会の景色は、街の灯りで溢れていた。道を走る車の走行音。行き交う地下鉄の騒音。どこかで吠えている犬の鳴き声や、小さくもれ聞こえて来る赤ん坊の泣き声。それらに耳を傾けながら、黒いパッケージからタバコを取り出し、ライターを弾いて先端に火を押し付ける。

ふーっと深呼吸のように煙を吐き出すと、紫煙はふわりと広がり、独特な香りを残して消えていった。

「梢が幸せだと、俺も幸せなんだ」

本橋は独り言のように呟く。

「……そんなんの…キレイゴトだわ」

女の声が切り捨てた。男は振り返らず、ただクスッと笑った。

美枝子は、火のついていない細いメンソールを銜え、バルコニーの手すりに寄りかかった。本橋がライターを向けると、メンソールの先端が赤く燃えた。

ふ一つと細く煙を吐くと、ミントの香りが重なった。

しばらくそのまま、見えない星を探して一人は夜空を見上げていた。

その5へ 『あたたかな家』（後書き）

説明臭くてすいません…

若干、直しました。

その7『ベースメーカー』

「なんで、梢ちゃんと別れたの？」

不躾に美枝子が聞いた。本橋は煙草を銜えたままバルコニーに頬杖をつき、向かいのマンションに灯る明かりを数えていた。頬杖をついた格好のままチラリと隣りの美枝子をみた。彼女は、短くなつた煙草を掌サイズの灰皿でもみ消し、灰皿ごと両手をコートのポケットに押し込むと、手すりに頬杖を着いた。何をやっても様になる女だな。と、自分も煙草を消し、同じ姿勢でマンションに視線を戻した。

「浮氣？ 喧嘩？ それとも、両方？」

美枝子はしつこく食い下がるが、本橋はまるでラジオでも聞き流すような態度で、マンションの屋上でチカチカするライトの点滅回数を数えた。

「…言えないとことは、捨てたんだ。」

強い苛立ちを覚えたが、百戦錬磨ひゃくせんれんまの弁護士は何事もなかつたようにパッケージに指を押し込み、一本摘んで引っ張り出すとそれを口に運び、火をつけ、ふーっと煙を吐いた。

「……さあね。」

ずっと後悔し続けていた過去を、今日初めて会った女に話して聞

かせてやるほどお人好しではない。

本橋は、指に挟んだ煙草を器用に指の間でくるくる回しながら、視線は向かいのマンションのバルコニーを見詰めていた。向かいのマンションは、半分以上の窓が暗く、まるでモザイクタイルのようだ。暗い壁に明かりが散らばっている。本橋はその窓の数を上の階から数え、苛立つ気分をやり過ごした。

美枝子は喋り続けている。

「あの梢ちゃんが浮氣するはずないから、やっぱりアンタが原因じゃないの？」

ああ、その通りだよ。と口走りそうになる口を煙草で塞ぎ、言葉の変わりに煙を吐いた。

「……ずいぶん絡むね。酔ったの？」

「そんなことないわよ。」本人的に自覚はないようだ。

「あれだけ飲んで、酔わないわけないよね？」男は呆れているようだ。

「そーゆー人間もいるのよ。」

覚えておくれのね。と、すこし上田線でそうこうと、本橋は、紫煙の溜め息をついた。

とはいって、酒の席でこんな風に絡んだことは、これまで一度もなかった。開店準備に追われていたから、疲れて酒が回ったのかもしれないと思つた。彼女の場合、酒量はあまり関係ないようだ。

「酒癖の悪い女はモテないよ？」

「大きなお世話を！」

絡んで悪かつたと言おうとしていた美枝子は、顔をしかめてそっぽを向いた。

本橋も、再びマンションに田を移した。住んでいるのかいなかが、向かいのマンションは、明かりがついていない部屋が目立つ。本橋は煙を吐きながら、今度は別のマンションの明かりを数えはじめた。

本橋には、美枝子が何を言おうとしているのか分かつてた。
従兄夫婦の幸せを壊すのではないかと危惧しているのだろう。そして、その危険因子である自分を、さつさと排除したいのだろう。

もつともだと思った。

もし、自分が柿崎の立場だつたら、俺のような人間を、愛しい妻に近づけたいとは思わない。まして、腹に触らせるなんて、考えられない。

本橋は、小さな携帯灰皿に煙草を押し込むと、自分の器は、この灰皿よりも小さい気がした。
だからこそ、柿崎の懐の大きさが妬ましくもあり、そんな彼だからこそ、尊敬できるのだ。

しばらく沈黙が続いた。向かいのマンションには、十八の明かりが灯っていた。と、いま十九個に増えた。
窓に灯る明かりは、実際はどうか分からぬながらも、暖かい家庭を想像させる。たぶん、見渡せる窓のどの明かりよりも、この部屋の明かりが一番暖かいだろう、本橋は思った。

「俺は別に、梢の幸せを壊そなうなんて思つてないよ。今日は本当に偶然会つたんだ。」

本橋は、彼女の言いたいことを先回りをして答えを出した。美枝子はバルコニーに凭れた姿勢のまま、振り返った。

男は、黒いパッケージを指で探り、空であることが分かると、くしゃつとパッケージを捻つて「コートに押し込んだ。バルコニーに凭れ掛かる。

「メンソールだけど…」

「あ、イタダキマス」

あまりに残念そうに見えたのか、美枝子がメンソールのボックスを差し出した。正直メンソールは苦手だが、貰うこととした。まるで爪楊枝のような細い煙草を銜えると、鼻にミントとニコチンが混じりあつた匂いがした。

「…まあ、美枝子サンの言いたいことは分かる気がするよ。」

細い煙草を銜えたまま、手の中に収まるライターに視線を向ける。かつて、恋人に贈られたジッポーは、表面がすり減り、地金が覗いている。手に馴染む重さのライターは、蓋を親指で弾かれ、先端に火をともす。

左手で風を避けながら、煙草の先に火をつけると、コートのポケットにしまった。煙を吐き出すと、鼻や口や喉がスースーする。なんだか目まで滲みる気がして、自然と目を細めてしまつ。

男がふーっと煙を吐く間、美枝子は本橋を観察していた。

キリッとあがつた眉、その角度に逆らつよつたれ目を、スタイルッシュな眼鏡がごまかしている。彫りも深くて鼻も高い。髪のな

い顎は滑らかで、シャープなラインをしている。全体的に甘いマスク。

ダークブラウンに染められた髪は、前髪がふわりと額にかかり、両サイドは、きれいに後ろに流れている。襟足はすこし長めだ・・・俗に言つ、フヨロモン系だと、美枝子は思つた。これじゃあ、ホストに間違われるのも無理はない。

海外の有名ブランドのスーツは、いかにイケメンと称される男でも、アイテムを間違えれば、嫌味になる。

一見、ホストように見えた本橋は、よく見れば、きちんとスーツを着こなしている。ネクタイも、ホストのように華美ではなく、スリーブに合わせた落ち着いた色合いだ。コートから覗く上着の襟元には、向日葵を模した金のバッヂが、鈍く光っている。嫌味がないのが、返つて嫌味だと、美枝子はメンソールを銜え、今度は自分の100円ライターで火をつけた。

正直に言えど、地味でおつとり系の梢とは不釣り合いで思えた。だからといって、思い切り肉食系の裕一郎と釣り合つてゐるかと言えば、若干疑問が残る。

本橋がどんな男なのか、見た目だけでは判断がつかないな。と、美枝子は細く煙を吐いた。

「そーいえばさあ、美枝子サンのお店はどういった感じの服を扱つてるの?」

ムツツリと黙り込んでいた美枝子は、くわえ煙草で類杖をつきながら、「フツーの服。」と、向かいのマンションで空しく揺れる洗濯物の数を数えていた。

干しつぱなしの部屋は、七件だった。そういえば、自分も干しつぱなしだつたと、数を八件に増やした。

「レディスのスーツも扱ってる?」

「うん。」

本橋の問いに素っ気なく応じる。細い煙草は、長い指の間でゆらゆらと煙を上らせていく。

大きな手に、華奢な煙草がひどく不釣り合いで見えた。

「うちの事務所の女の子…ぶっちゃけ、センスが悪いんだ。オープンしたら紹介してもいい?」

「はあ?」

今まで不躾な質問をぶつけた相手に、何を言っているのかと振り向くと、本橋は屈託のない笑みを浮かべている。

なんの計算もないその顔に、この男がモテる理由をみた気がした。

「…・べ、別にいいけど」

「じゃあ、何かもらえない?」

「…なにか?」

美枝子はメンソールを左手の指に挟んだまま、右手でコートのポケットを探り、左側のポケットから、しわくちゃになつたチラシを引っ張り出すと、そのまま本橋に手渡した。

「ん。」

「どーも。」

皺になつた紙を受け取り、破らなによつて氣をつけながら、およそB6サイズの紙を広げた。

チラシは片面のみに一色刷りで印刷されている。何かに使つたのか、裏面には、はんじくじんなん判読困難な文字が殴り書きしてある。

「…メモつてあるみたいだけど、これ貰つてもいいの？」

本橋が尋ねると、美枝子は一度チラシを覗き込み、「大丈夫」と再び紙を男に渡した。

チラシには、大手百貨店のビニーテ、いつオープンするのかが、田を引くレイアウトでプリントされていた。

オープンは約一週間後の金曜日のようだ。本橋は背後の部屋の明かりで文字を読んだ。

「ふうん、KASA BURANKA? 花言葉は【じゅか高貴】… だつた

つけ?」

「…よく知つてゐるわね」

「まあね。」

驚いた顔をしている美枝子に向かつて、本橋は得意げに笑つた。何のことはない、事務所に花言葉に詳しい事務員がいるのだ。常に花言葉の本を開き、あれこれと助言をくれる。これまで、あまり参考にしたことはなかつたが、今日初めて役に立つた。

(変なオトコ) 美枝子はあきれたよつたため息をつき、星の見えない夜空にミントの煙を吐いた。

「心配しなくとも、一人の邪魔をする気はないよ。それに、柿崎サンを敵に回したら……考えるのも恐ろしいよ。」

苦笑いを浮かべながら言つと、もひつたチラシを丁寧に四つ折りにし、上着の内ポケットに納めた。

あの男ならどんなこともやりかねない。と呴いた男の言葉に、美枝子は思わず吹き出した。

「いつもわざわざ笑つて笑つてればいいのに」

「え？」

本橋は横田で美枝子を見ると、口元に笑みを浮かべる。

「あ、アンタの前以外では笑うわよ」

憎まれ口を返すと、男は「ひどいな」と、短くなつた煙草を銜えて笑つた。

携帯灰皿に煙草を押し込んだ美枝子は、それごと両手をホールのポケットに押し込み、寒そうに背中を丸めた。

「美枝子サンつてさ、枯れ専でしょ？」

「なつ」

唐突な一言に、美枝子はアイラインで強調された目をさらに大きく見開いて、にやりと笑んでいる本橋を振り返つた。

「な、なによ、いきなり！」

しどりもどりになりながら、美枝子が言葉を返すと、本橋は楽しそうにその様子を眺めていた。

「さつきのバーのオーナー……松山さんだっけ？ 彼を見る目がハ

一ト型だつたよ

クスクス笑いながら美枝子をからかう。美枝子は、松山を思いだしたのか、耳まで真っ赤になつてゐる。

「あ・・・あれば、べつに・・・そういうわけじゃ・・・」

さつきまでの威勢はどこへいったのか、美枝子は口の中でも「も」といいわけをしてゐる。その顔が見ていてたのしい。本橋の笑みが深くなる。

その笑みに、美枝子は観念したのか「あーもーー」と声を上げた。

「そりよー私はオジサンが好きなのー悪い?ー」一気に告白する。
「へえ、どんなタイプ?」

興味を全身で示すよつて、本橋が身を乗り出す。美枝子は、あたりに視線を彷徨さまよわせながら、どこかに答えが落ちていないかと探した。当然、見つかる筈もなく、唇を僅かに尖らせている。

「…さ、作業ズボンとか…ヘルメットとか…軍手とか…似合つ、やんな人!」

「……変わつてるね」

「アンタよりはましよーあんなフリルだらけの女!」

「あれは違うからつー!」

本橋はうんざりと顔をゆがめた。そのまま、一人は押し黙つたままバルコニーに凭れていた。

お互に煙草が吸きたので、部屋に戻ることにした。

「俺、そろそろ帰ろうかな」

左腕の高級腕時計で時間を確認した本橋は、コートのポケットから薄いケースを取り出し、ミントを一粒口に放り込むと部屋の窓に手をかけ、また戻ってきた。

「……柿崎サンには、早急に【羞恥心】つてものを覚えて欲しいね。

」
本橋は、バルコニーに寄りかかり、呆れたようにため息をつくと、眼鏡を外して目頭をもんでいる。

美枝子が振り返ると、ソファに座る妻に寄り添つて、顔を寄せている。

客が来ていることを忘れているのか、すっかり一人の世界だ。寒いバルコニーから、暖かい屋内で口付けを交わしているカップルを眺めるしかない。首筋を撫でる風が、急に冷たさを増した気がした。

「・・・俺、どのタイミングで入つたらいいんだ? ってか、美枝子サン今日泊まるんでしょ? 勇気あるね...」
「・・・たつた今、後悔しあじめたところ。」

二人は肩を落として深いため息をついた。

彼女の従兄殿は、妻とのスキンシップは最重要事項である。彼の懐の大きさは尊敬に値するが、周囲への配慮が欠落してしまうのが、彼の最大の欠点でもあった。

寒いバルコニーで朝を迎えるくてはならないのかと、一人が不安になり始めた頃、裕一郎が「お前ら、寒くないのか？」と、呆れ顔で窓を開けた。

「誰のせいだと思つてんだよ！」

「ちょっとは、周りに気を使つてのよ！..」

凍死するかもしれないと考えていた二人は、暢気な男を思い切り叱り飛ばした。

怪訝な表情の裕一郎の後ろでは、彼の妻が穏やかに寝息を立てていた。

その7 「ベースメーカー」（後書き）

今更ですが、本橋クンの容姿が初めて明らかになりました。

柿崎サンに関しては、いまにはじまつたことじやない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6403x/>

日向のひまわり

2011年11月24日13時45分発行